

チェブラーシカ

2008(平成20)年7月21日鑑賞(テアトル梅田)

★★★



監督・脚本=ロマン・カチャーノフ/原作=エドワード・ウスベンスキー/声の出演=クララ・ルミャーノワ (三鷹の森ジブリ美術館配給/1969年、1971年、1974年、1983年ロシア映画/73分)

……宮崎駿監督の最新作『崖の上のポニョ』(08年) 鑑賞の翌日に、1960～80年代のソ連のアニメを鑑賞！ 日ソ比較、新旧比較をしても甲乙つけがたい出来、と私は思ったが……。シンプルながら、全4話には友達、学校、列車などそれぞれ面白いテーマがあり、ストーリー性も十分。たまには、こんな素朴な童話で心を洗ってみるのもいいのでは……。

デジタルリマスター版に感謝！

ロシア史上最も愛される人形童話『チェブラーシカ』全4話完全版が劇場で大公開！ 1969年『ワニのゲーナ』、1971年『チェブラーシカ』、1974年『シャパクリヤク』、1983年『チェブラーシカ学校へ行く』が甦るのは、6月12日に観たアルベール・ラモリス監督の『白い馬』(40分、53年)と『赤い風船』(36分、56年)と同じように、デジタルリマスター版のおかげ。まずは、こんな技術の進歩に感謝！

意外にスナナリとロシアアニメの世界に……

7月17日に観た『ウォンテッド』(08年) はハリウッド映画ながら、監督はロシアのティムール・ベクマンベトフ。ティムール・ベクマンベトフ監督を有名にしたのは、『ナイト・ウォッチ/NOCHNOI DOZOR』(04年)と『デイ・ウォッチ』(07年)の大成功によるものだが、ロシアにハリウッドの向こうを張るようなこんな映画が誕生していることにビックリしたもの。そう考えると、1917年のロシア革命からソ連邦成立に至る共産党の一党独裁体制の下でも、ディズニーに負けない「アニメをつくれ！」という命題があっても全然不思議ではない……？

私は『チェブラーシカ』を『崖上のポニョ』（08年）の翌日に観たが、私には『崖上のポニョ』より『チェブラーシカ』の方が素朴に楽しむことができた感もある。それはロシアアニメとわかっているから、かえって率直に異次元の世界に入り込んでいけたため。もちろん私は、ロマン・カチャーノフ監督を知らないし、「三鷹の森ジブリ美術館」とロシアアニメとの結びつきも知らないが、それらはパンフレットを読めばすぐにわかること。『崖上のポニョ』はあまりにみんなが絶賛することと、あまりのうんちくの多さに私は白けてしまったが、それが『チェブラーシカ』には全然なし。したがって、意外にスナナリとロシアアニメの世界に……。

ホントは二枚看板！

『チェブラーシカ』（ぼったりたおれ屋さん）という奇妙な名前がついた、正体不明の生き物がこの映画のタイトルだから、主人公は当然このチェブラーシカ（クララ・ルミャーノワ）。そう思っていたが、実は全4話の物語はチェブラーシカとワニのゲーナとの二枚看板によって成り立っている。

ウォルト・ディズニーのキャラクターはミッキーマウス、ドナルドダックなどたくさんあるが、日本語版翻訳者児島宏子さんに聞いた「チェブラーシカに関する8つの質問」によると、「ロシア人は、とにかくワニが好きなんですよ。児童文学でも絵本でもアニメーションでも、ワニが登場するものは多いですね。自分の国にいない生き物への憧れかしら」とのことだ。へえ、なるほど。

チェブラーシカはたしかに愛されるべきキャラだが、ストーリー構成の主導権はワニのゲーナが握っているから、彼の状況判断能力（？）と状況突破力（？）に注目を！

耳になじむ素朴な2曲

「海はひろいな 大きいな」という唱歌に加えて、「海そのもの」を歌った「新しい海の唄」をつくりたいとして、宮崎駿監督は思い悩んだ挙げ句、『海のおかあさん』という歌詞を書き上げたらしい。現在テレビCMでもよく流れているこの曲は、たしかに誰からでも愛され、子供たちも歌いやすい名曲かもしれないが、私にはあまりピッタリこない。むしろそれよりも、『チェブラーシカ』で聴いた、素朴なメロディの『誕生日の歌』や『青い列車』の方が、私の耳になじむのだが……？

第1話のテーマは友達

『チェブラーシカ』は、二枚看板のゲーナとチェブラーシカを中心とした基本的な物語に、さまざまなキャラが絡まる物語。そして、第1話のテーマは友達。友達が集まったのは、ゲーナがいろんな場所に「友達募集」の貼紙をしたことがきっかけだが、そんな風にしなれば動物園でワニとして働くだけのゲーナに友達ができなかったわけだ。逆に、何か1つこんなきっかけがあると、チェブラーシカはもちろん、小犬のトービクや女の子のガーリヤ、さらにライオンのレフ・チャンドルやキリンのアニュータなどが次々と集まってきたのは、やはりみんな孤独だから……。そんな友達をテーマとした1969年当時のソ連アニメを観れば、当時のソ連の世相が一目瞭然……？

ピオネールとは？

第2話と第4話にはピオネールが登場するからそれに注目！ ピオネールとは、ソ連社会主義下でのボーイスカウトのようなものらしいが、それ以上の実態は不明。

映画には4人の少年たちが登場し、行進したり、小鳥の巣箱をつくったり、鉄屑集めをしたりと大活躍……。ところが、小鳥の巣箱をつくっている彼らの楽しそうな様子を見て、ゲーナとチェブラーシカがそれに参加したいと申し出ると、彼らはそれに対して明確にNOの返事を。それは、ゲーナやチェブラーシカには行進もできないから……。最終的には、4人組のピオネールとゲーナ、チェブラーシカは仲良しになるのだが、ソ連時代に存在していたこんなピオネールに注目！

問題提起もしっかりと

4話すべてに登場する面白い「いじわるばあさん」がシャパクリヤクだが、このキャラは青島幸男が演じたいじわるばあさんとは全然違うから、日本ではちょっと思いつかないキャラ……。第3話では、そんなシャパクリヤクに切符と荷物を盗まれてしまったため苦勞するゲーナとチェブラーシカの物語だが、その途中で観光客の若者たちとの絡みや、川で泳いでいる子供たちとの絡みが登場する。そして、子供たちの身体が汚れているのは、工場からの廃液によるものだとわかると、ゲーナとチェブラーシカは川の水を取り戻すべくある行動を。

この第3話が製作された1974年は、私が公害事件に取り組むべく、晴れて弁護士

バッジをつけた年。私が公害反対のために弁護士として活動を始めたのと同じ年に、ソ連でも、工場の廃液流出による川の汚染を防ぐために闘うゲーナとチェブラーシカという同志が存在していたことに感激。また、共産党の一党独裁下でも、この映画がしっかりとこんな問題提起をしていることに感心。

2008(平成20)年7月22日記

ミニコラム

プーチン批判は命がけ？

私は08年2月22日付大阪日日新聞「弁護士坂和章平のLAW DE SHOW」に「プーチンの『説明責任』は？」という見出しで『暗殺・リトビネンコ事件^{チェニス}』を載せ、『シネマ18』では詳細に評論した。この映画の中で、「劇場占拠事件の犯人の1人が、今プーチン政権で働いている」「世間は無関心。あの悲惨なテロがヤラセだったのに」「こう思ってる。好きに書くがいい。必要なら消すが今は生かしといてやる」とすごい話をしていたのが、チェチェンの戦争犯罪を告発、報道してきた女性ジャーナリストのアンナ・ポリトコフスカヤ。そんな前提知識を持つ私は「ロシア人弁護士の車に水銀」という08年10月16日付毎日新聞他の記事にビックリ！こりゃ一体ナニ？

記事によると、アンナが06年10月7日に自宅で何者かに射殺された事件については、人権派女性弁護士カーリーナ・モスカレンコがアンナの遺族の代理人をつとめていた。彼女は、プーチ

ン政権下で投獄された元石油王ホドルコフスキー氏の弁護も担当し、反プーチン派の弁護士として有名だった。そんな彼女の車から水銀が発見され、彼女と同乗の子供が水銀中毒の症状を訴えたわけだ。場所はフランス東部のストラスブール。同所にある欧州人権裁判所に、彼女がロシア当局によるチェチェンでの人権侵害問題などを提訴し、現地入りしたところ、10月13日に事件が起きたらしい。仏警察当局は殺人未遂事件として捜査に乗り出したが、同僚弁護士はこれを「ロシア当局からの警告か脅しの行為だ」と非難している。さてその真相は？

『チェブラーシカ』の評論で私は、工場の廃液流出による川の汚染を防ぐために闘う姿を観て、「共産党の一党独裁下でも、この映画がしっかりとこんな問題提起をしていることに感心」と書いたが、やっぱり今のロシアでは、プーチン批判は命がけ？

2008(平成20)年10月24日記